



慶長三陸地震 M9 級か

三陸沖が震源と考えられていた1611年の慶長三陸地震は、じつは北海道太平洋沖で17世紀初頭に起きたとされる巨大地震と同じものだった可能性があるという分析結果を、北海道大学の平川一臣特任教授（自然地理学）がまとめた。慶長三陸地震では福島県まで津波が襲来したと伝えられているが、これが北海道太平洋沖の地震だったとすれば、マグニチュード(M)9に達する巨大地震だった可能性もあるという。静岡市で先月開かれた日本地震学会で発表した。

北海道太平洋沖の地震は十勝根室沖が震源域で、その規模はM8.6程度とみられていた。しかし、最近の津波堆積物調査で、本州北部に近い北海道南西部にも10級級の大津波が襲来したことが判明、規模はより大きかったらしい。一方の慶長三陸地震は福島県以北に津波が襲来し、震源域は三陸沖と考えられていた。

平川さんは7月、いずれの想定震源域にも近い下北半島の青森県東通村で、津波堆積物を調べた。もし二つの地震が別物なら、それぞれの津波堆積物を含

「北海道太平洋沖」と同一説

む別々の層が見つかるはずだが、このころのものは一層しかなかった。

平川さんは「慶長三陸地震では、揺れてから津波が到達するまでに2〜4時間かかった。これは、震源が三陸から遠かった可能性を示している。このことから、慶長三陸地震は17世紀初頭の北海道の地震だった可能性がある」と分析。「これが事実だとすれば、東北地方の太平洋沿岸では、北海道で起こる巨大地震も考慮した津波対策が必要となってくる」という。

東北大学名誉教授 首藤伸夫



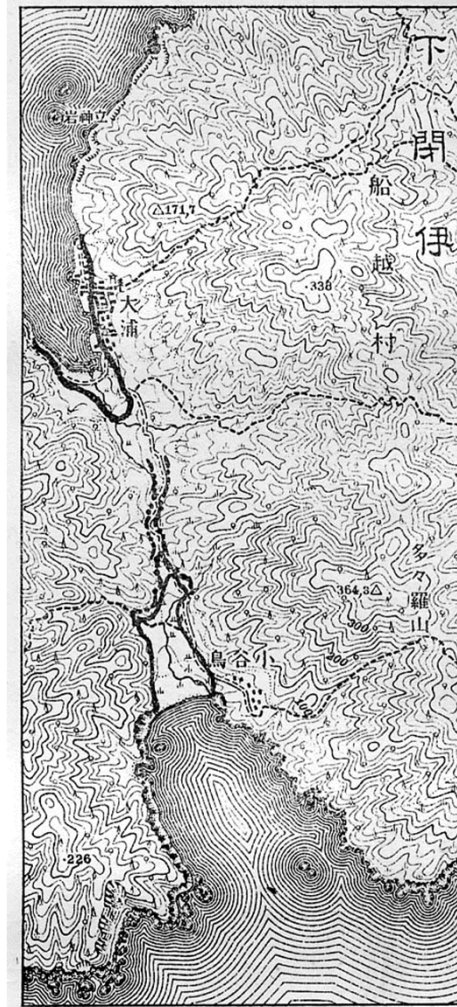
今村明恒

士博(理)村今(林)田本の究講設施設災防
(廳正廳縣於)

船越村小谷鳥と同村大浦とは某距離約2軒ありて両者の境界をなす分水嶺の標高は25米乃至30米である。……津浪は昭和8年度12米、明治29年度17.2米と計測され両者共に分水嶺に達し得なかった。伝説に拠れば慶長16年のものは峠を越えて大浦へ侵入したとの事であるから、小谷鳥海岸に於ては25米位の高さであつたらしい。

今村明恒(1934)

平成津波
(国土地理院)



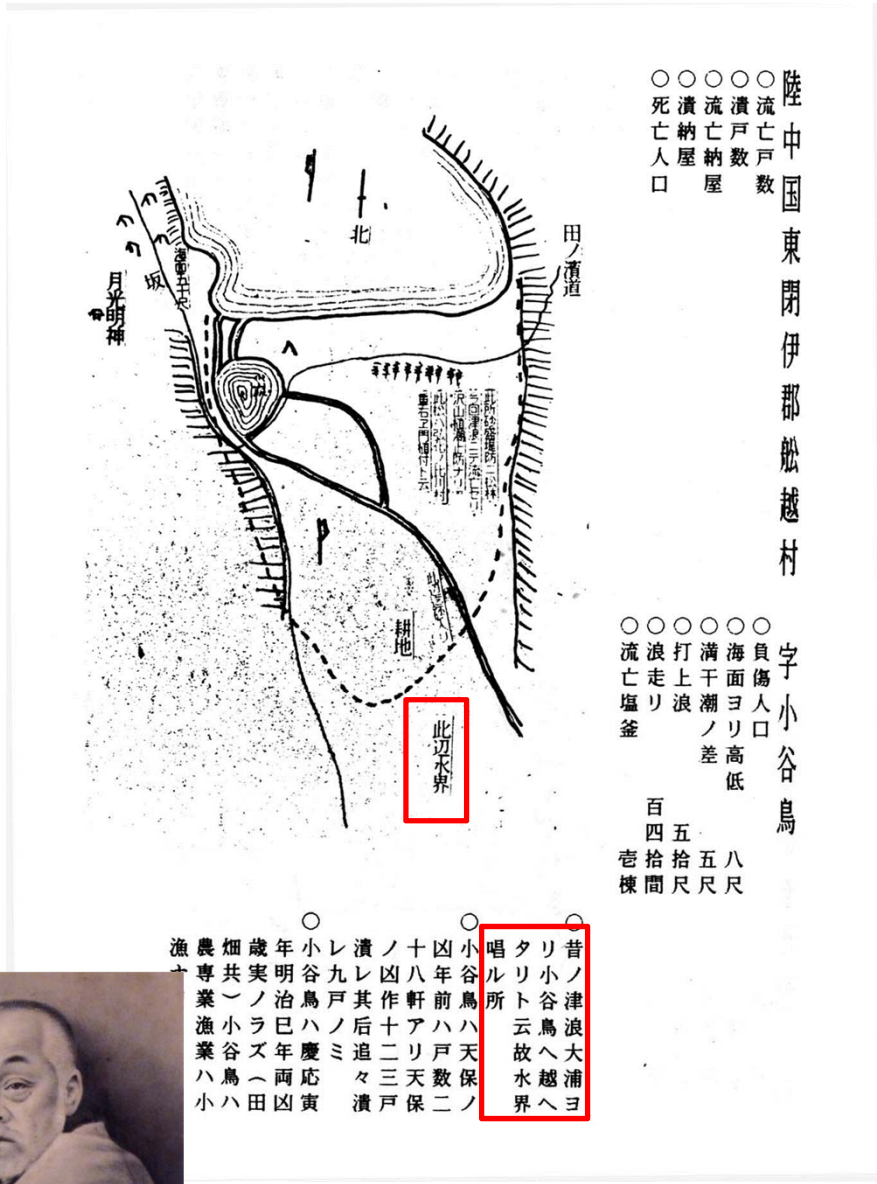
—— 昭和8年
- - - - 明治29年
- · - · 慶長16年

第2圖 浸水區域 (1/50,000)

平成津波の測定値
小谷鳥漁港:26m(R)
山田湾大浦:11m(I)
(東京大学・東京海洋大・
ジョージア科大)

明治三陸大津波後の探話

◎船越の字小谷鳥より大浦に越ゆる山頂に船繋ぎ場と稱する高さ古跡ありて故老の傳へよ五百年前大海嘯のありし時は水此山に上り船を繋ぎし處なりとして標立てるあり馬夫人足と珍らし氣に旅客に説明せる處なるが今回の海嘯は殆んど斯の如く狂濤此山を遶るの跡其標より十間だも隔たらせと實に非常あるを知るべし



山奈宗真、遠野生まれ、当時49歳。

宮古周辺の津波と被害

「宮古村の海浜通りは一軒もなく無残波にとられ人死多く御座候、僅かに黒田村の山辺に数戸が残る」(宮古由来記)のみで、約200軒が流失したという。また、鎌が崎ではその波が蛸の浜を越え、横山八幡宮、和見館間(たてま)にあった常安寺、本町の代官所なども流されたと伝えられる。(宮古大年表)

「磯鶏 ○北村福太郎の家に石垣まで慶長の津浪打上たいと云う。海岸より2百5、60間(460m程度)」(山奈宗真)

「○中島の古書によると、慶長16年10月28日津浪あり 津軽石にて150人死亡とあり」(山奈宗真)

慶長津波時の宮古口碑

八幡山麓にあった常安寺は住職が小山田に法要で留守中流された。

鎌ヶ崎では、蛸ノ浜を越えた波と宮古湾を、めぐって北進した激浪がはげしくぶつかって、家屋を倒壊流失して、ほとんどの住家と人畜を押し流した。当時宮古村、黒田村（沢田、横町、小沢の一带）で民家二百余戸の内、わずかに数軒が小沢の方に残っただけ。

大槌津輕石は市日故人余余死申候、宮古町家寺等も被取候上人死候事百人余くわか崎之事相知不申候、なみ先小山田千徳迄参候由小山田より八十（木？）沢へ参候道柿沢と申所有之候、右之所へ仙台より参り候五大刀船おし上、かきにても積候哉、其之所破船くしがゆ沢中に有之候付、其之節より柿沢と申伝候由に御座候、そげい高浜之義知不申候、牛馬人共に確と知れ不申候

（梅莊見聞録・古実伝書記）

鎌ヶ崎では、蛸ノ浜を越えた波と宮古湾を、めぐって北進した激浪がはげしくぶつかって、家屋を倒壊流失して、ほとんどの住家と人畜を押し流した。



蛸の浜



昭和津波高 約6米

明治津波高 約13米
流失家屋274戸
死者28名

慶長津波は峠を越えた。



昭和12年6月13日
鎌ヶ崎青年団 建立

宮古町家寺等も被取候上人死候事百人余（梅莊見聞録・古実伝書記）

当時宮古村、黒田村（沢田、横町、小沢の一带）で民家二百余戸の内、わずかに数軒が小沢の方に残った

横山八幡宮、和見館間にあった常安寺、本町の代官所なども流された



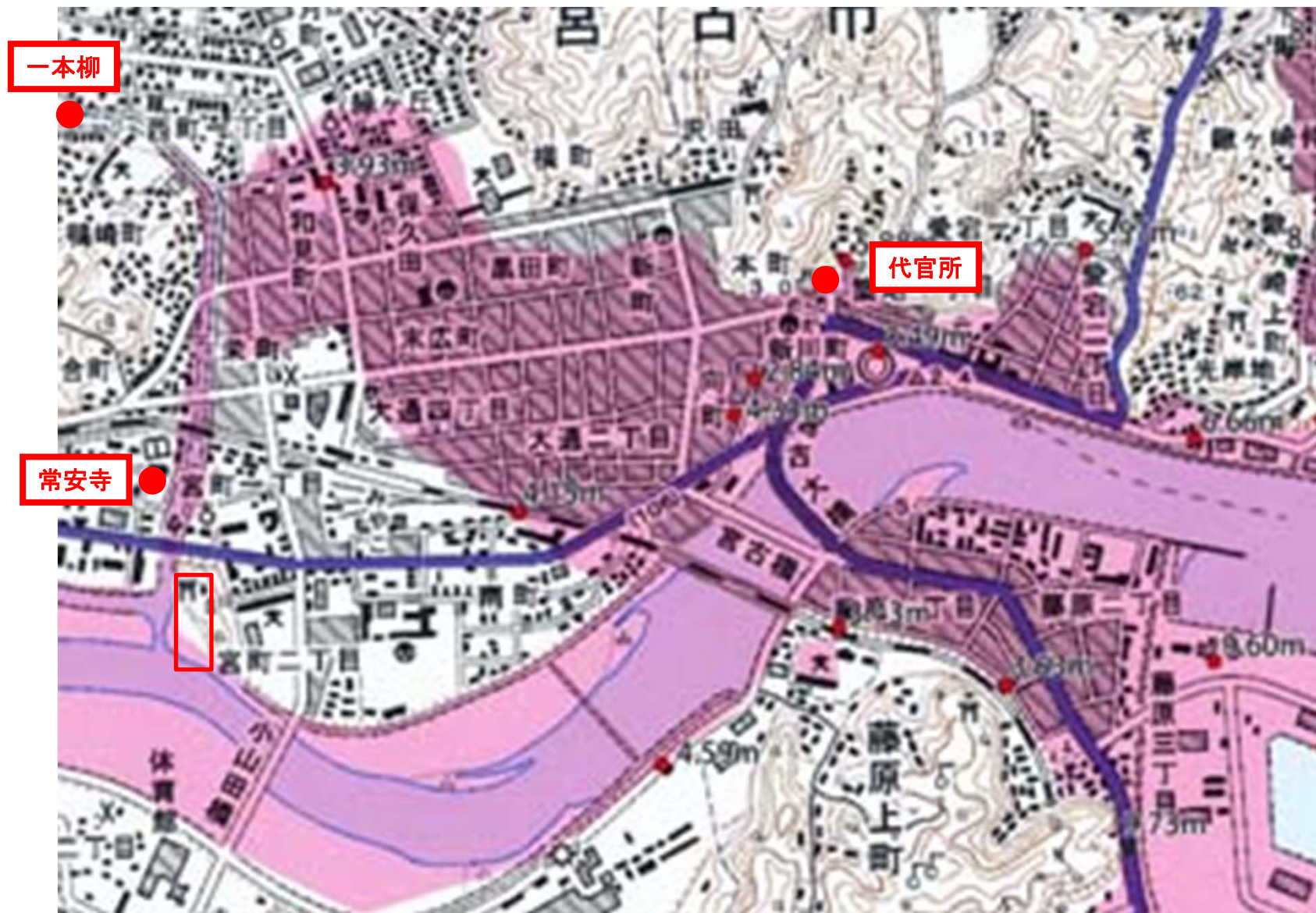


宮古市田の神1丁目

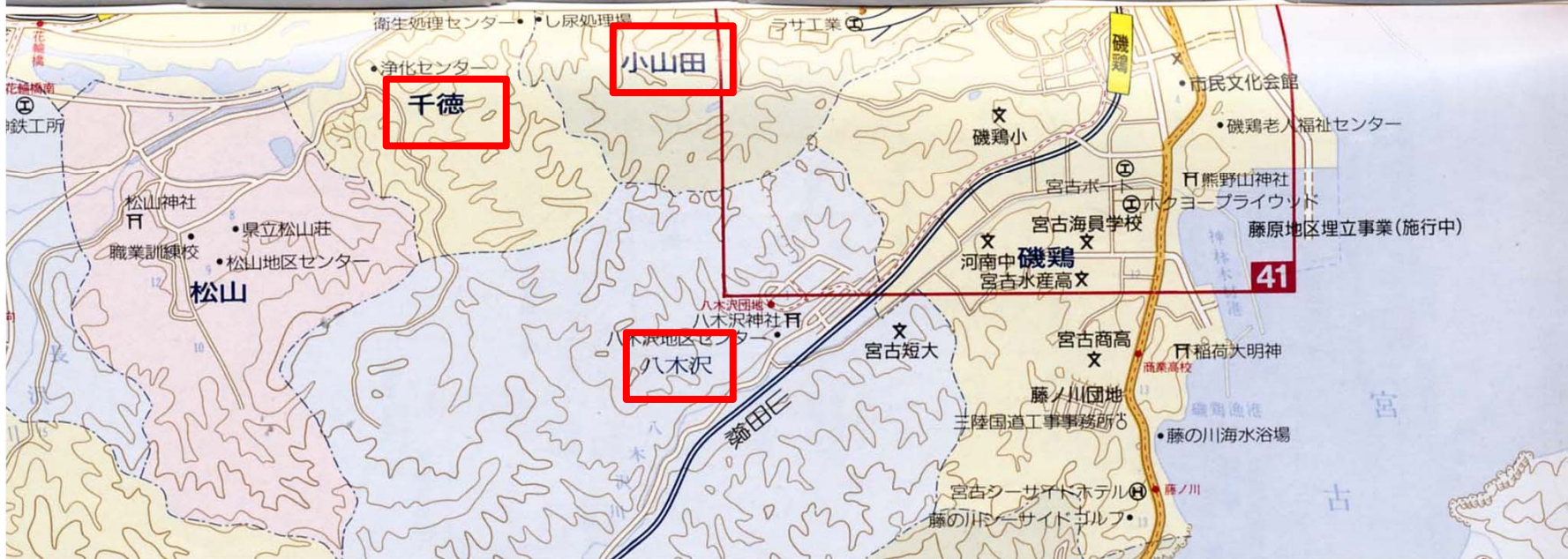
言い伝えに拠れば、この場所に柳の大木あり、一本柳と呼ばれた江戸時代のヨダ（津波）は宮古にも大被害を与えた、津波により山口川逆流せる波に乗って来たダンベ（舟）を一本柳に繋留したと伝えられている。

（現在の碑は移設されて西町3丁目にある）

平成津波浸水域（国土地理院）との比較



なみ先小山田千徳迄参候由小山田より八十(木?)沢へ参候道柿沢と申所有之候、右之所へ仙台より参り候五大刀船おし上





磯鶏

北村福太郎の家に 石垣まで 慶長の津浪 打上たいと云う
凡 海岸より二百五、六十間の所にあり。(山奈宗真)

大槌津軽石は市日故人余余死申候 (梅荘見聞録・古実伝書記)

「○中島の古書によると、慶長16年10月28日津浪あり 津軽石にて150人死亡とあり」(山奈宗真)

(岩手県津波史)(森嘉兵衛)

……梅内佑訓の「聞老遺事」には「**南部津
軽ツ十三男女溺死三千余人**」と言っている
からかなりの被害であったらしい。人口の
状態から見ると今日の約四分の一で
あったのに、今回(昭和8年)位の被害が
なったのだからかなり激しい津波だった事
が想像される。

公助の最初の記録

(宮古由来記)慶長十九年(十六年)十月廿八日昼八つ時に大津波にて門馬・黒田・宮古以の外に騒動にて小元助兵衛御朱印御証文並御用帳共取為持後の館山に遁登り候。同七つ下刻の頃大方に水引申候。海辺通は一軒も不残波にとられ。人死多く御座候。家とられ候ものは路道にまよひ申候に付。小元助兵衛見分に廻り。見届の後森岡へ申上候て**身帯相応に御助金被下置候**

(三陸沿岸海嘯史) 東京日日新聞 岩手版 昭和8年3月
-4月

……小本助兵衛見分に廻り。見届の後森岡(盛岡)へ申上候て身代相応に御助金被置候……

とあり。現今と同様救恤金が出たが応急の処置として衣食糧品を送るなんといふわけにはゆかなかつた。……

公助の次の記録

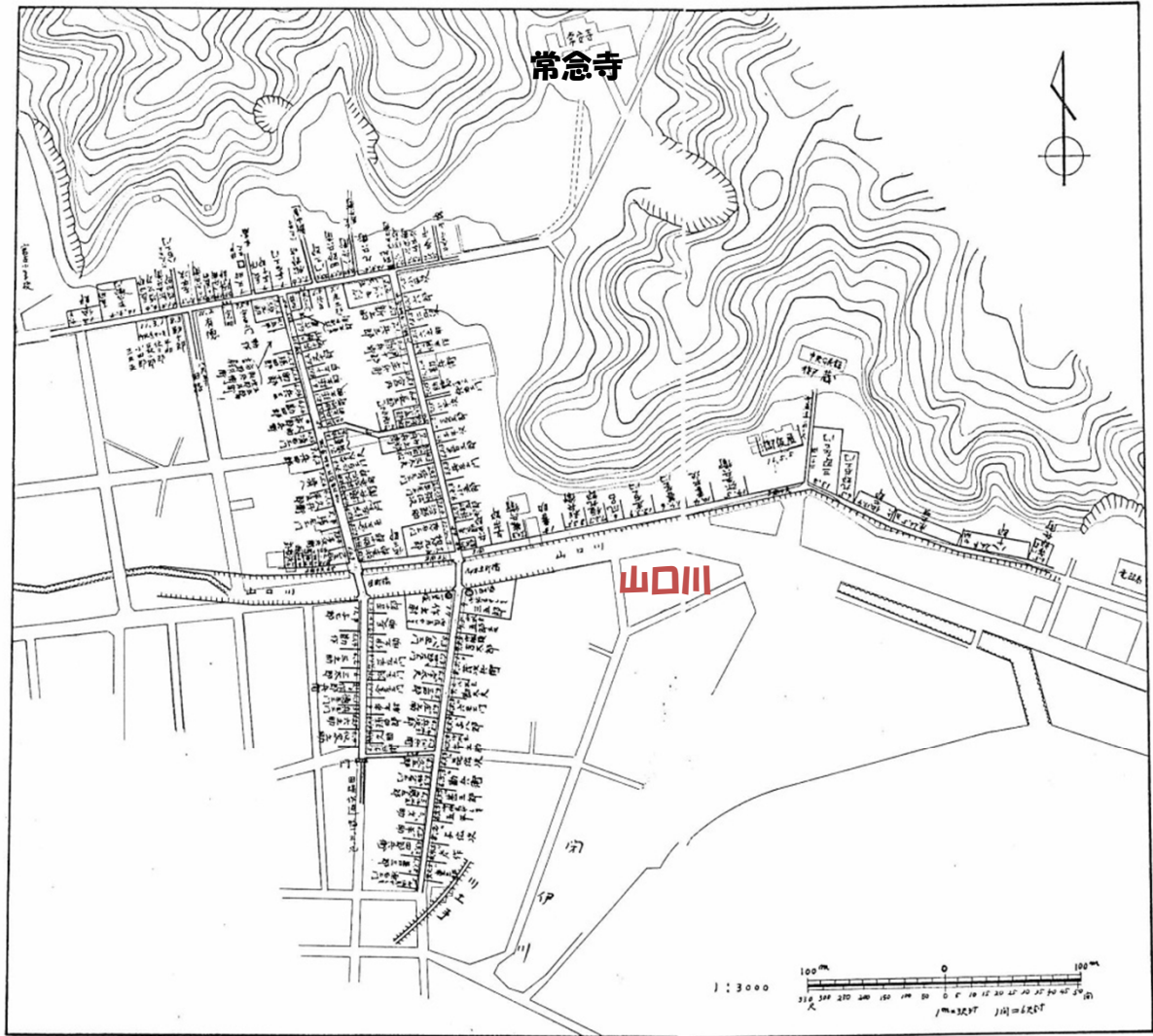
- **1677年延宝房総沖津波**

平藩では被災者を新しく中間として50人を採用、薬用にと米3石を与えた、津波で田に砂が入り不作となったので年貢を免除した。(平藩万覚書)

- **1703年元禄地震**

小田原藩は2代藩主大久保忠増の時であったが、7日間延べ29,323人に粥を施した。もっとも、地震の際には藩主は江戸に居たらしく、米穀蔵の役人が許可を得る時間がないと独断で米蔵を開いた。後に賞せられたと云うが、名前も伝わって居らず真偽の程は判らない。伊豆でも、宇佐見村など7ヶ村に590俵の米を御年貢蔵から下げ渡したとの記録がある。

1615年の町割り



黒田村、宮古村屋敷数図＝元禄5年（1692年）の御町屋敷表口改帳より
 復元（宮古市建設局）

4月1日、盛岡藩2代藩主南部利直が慶長大津波の被害准市の為出発。30日ほど宮古に滞在。

5月3日、南部利直は黒田村を割いて宮古村を立てる。復興計画の起点として本町を据え町割りを指図し、藩の外港として宮古湊（鋤が崎）を開いた。
（宮古大年表）

元禄五年十月廿五日
 里田 御町屋敷表口改帳
 本町 五三
 横町 五三
 田町 五三
 御水主町 五三
 新町 五三
 黒田村 五三
 宮古村 五三
 山口川 五三
 常念寺 五三
 鋤が崎 五三
 盛岡藩 五三
 慶長 五三
 大津波 五三
 被害 五三
 准市 五三
 出発 五三
 30日 五三
 宮古 五三
 滞在 五三

1632年、代官小本助兵衛が町割り。新町、田町、横町、御水主町（現向町）。
（宮古大年表）

復興した宮古村の戸数(元禄5年)

